



おじさんズ通信

2024年6月号（No43）

発行元：登別市新生町
桃柿通 緑風舎
発行者：おじさんズ3号



発行は毎月15日頃。バックナンバーは右のQRコードからどうぞ。

🍷手前味噌稿 1

おすすめ郷土資料、次の1冊は？

登別市立図書館のホームページ（HP）サイドメニューに、「市民活動サポーターおすすめ郷土資料」コーナーの設置許可をもらい、これまで8冊の関係資料を掲載しました＝写真右＝。

その8冊目、宮武紳一著「郷土史探訪・郷土史点描」のアップから1年近くたつことから、新たな資料をひと、目下、狙いを定めているのが地元の文化団体が編集し、9年前に発行された明治期の某回顧録です。明治の初めに幌別村に開拓に入った宮城県白石の元家老が、確か明治20年代に書き残した、漢字カタカナ交じりの村史ともいえるべき記録と、それを現代文に訳したものです。

問題は、図書館HPへの転載許可を、発行元から得られるかということ。重版はないにしろ、まだ残部があれば「不可」の返答もあり。ならば別のターゲットは……と思案中です。同コーナーへのQRコード（右図）を載せました。のぞいていただければ幸いです。



🍷手前味噌稿 2

キネ旬、放出前に些少録を

今年の本通信2月号で、わけあって抱えている500冊近いキネマ旬報の一部を、映画会などで頒布し、浄財を室蘭シネマクラブに進呈することをお伝えしました。

すると最近になって、押し入れに閉じ込められていた雑誌たちが、「それで、はいサヨナラかよ、つめてえな」とスネているような気がして、思い直しました。別れゆくバックナンバーたちの抄録を作ろう、いや、それほど内容は濃くないから些少録と呼ぶべきでしょうか。とにかく、一番古い930号（1986年2月下旬号）から号数をさかのぼりながら、特記事項を記録しようーと、ワード文書の作成を始めました。よって、イベントでのドネーション的頒布会は先延ばしと、相成りました。

掲載項目は①表紙写真②号数・発行年月号名③主な記事、グラビアなど。スペースはこれくらいか、と適当に囲んだ「内容」項目の文字数は、おおよそ160字程度と限られています。

キネマ旬報ばっくんば〜		
表紙	No. 発行年/号	内容
	892号 1984年 8月下旬号	「今、気になるミニ・シアター」特集として、岩波ホール支配人、高野悦子氏をはじめ、六本木の俳優座シネマデ、新宿のシネマスクエアとうきゅう、キネカ大森などの責任者にヒット作品や好きな映画や監督などをインタビュー。ほかに三船敏郎が「パラ島で決意した『風林火山』のタイトルで、三船プロ誕生経緯や製作者としての苦悩、苦渋などを語っている。
	893号 1984年 9月上旬号	特集はマイケル・ダグラス製作・主演のアドベンチャー大作「ロマンシング・ストーン秘宝の谷」。ほかにロバート・レッドフォードの野球映画「ナチュラ」や、7人のテスト・パイロットが登場する「ライトスタッフ」を特集。日本映画では寺山修司監督の遺作「さらば箱舟」を紹介。特別リポート「生まれ変わる有楽町、日比谷映画街」は新生有楽町マリオンの全容を伝えている。
	894号 1984年 9月下旬号	この年10月日本公開のロバート・デ・ニロ主演「ワンス・アポン・ア・タイム・イン・アメリカ」。セルジオ・レオーネ監督インタビュー、「アメリカ禁酒法下のユダヤ人」（常盤新平）など4人の短評など掲載。特別エッセイは財津一郎の『お葬式』撮影に参加して。グラビアでは「今夏、全米で記録的大ヒット」のタイトルで特撮技術を駆使した「ゴースト・パスターズ」など紹介。
	895号 1984年 10月上旬号	阿佐田哲也原作、和田誠監督「麻雀放浪記」を特集。通称・坊や哲に真田広之、ほかに鹿賀丈史、大竹しのぶなどが戦後焼け跡人生劇場を繰り広げる作品。洋画は1911年のサハラ砂漠を舞台にした仏映画「フォート・サガン」の戦争大作を紹介。ほかに柴田恭三主演「チ・ン・ピ・ラ」や角川春樹事務所制作の

200ページ余の冊子をめくり、「この名作を取り上げるか、こっちの洋画にするか」と思案していると、時間はどんどん過ぎていきます。結局、特集で紹介された話題の映画作品案内が中心になりますが、じっくり読むと、結構、面白いコラムなどにも、ぶつかります。

例えば、1984年4月下旬号、手塚治虫の「観たり撮ったり映したり②映画のろけ」では、奥さんが映画通なのを知ったのは結婚してかなり年数を経てからで、「このコラムを読む独身者諸君よ、願わくば、結婚の相手は同好の映画通であってほしい」と助言しています。

このキネ旬些少録作り、せめて100号あたりまで書きとどめ、我がホームページに掲載しようかと企んでおりますが、その到達目標に達する前に、あちらの世界に引越すやもしれません。神のみぞ知る…ですな。

映画のタイトルを見て、ちゅうちょせず借りてきたDVD「丘の上の本屋さん」。昨年3月、日本で公開されたイタリア映画で、すでに、御覧になられた方もおいででしょうが、ある解説の一文「本が年齢や国籍を越えて、絆を育んでいく様子を描いた心温まるドラマ」とのご案内がピッタリの作品です。



舞台はイタリア中部の村チヴィテッラ・デル・トロントの小さな古書店。ある日、店主のリベロは店の外に立つ移民の少年に気づき、「イタリア語は読める」と答えた少年にミッキーマウスの漫画本をただで貸し与えます。それを境に「ピノッキオの冒険」、「イソップ寓話集」「星の王子さま」「白鯨」「ロビンソン・クルーソー」などを次々と手渡し、返しにきた時、店主は必ず少年に感想を求めます。

その先のあらすじは省略しますが、「全部読んだか?」「ええ」「どこが良かった」「猫とキツネのところ」といった店主と少年のやりとりが、この映画のキモのようです。ある映画ファンは、そのブックリストから「リベロが素晴らしい『本のソムリエ』であり、『人生の教師』であることがよくわかる」とも評しています。

子どもたちの読後感想をどう引き出し、大人はどんな手ごたえある言葉を返して心のキャッチボールをすべきか、大いに考えさせられる映画でした。

本をめぐるアレコレ1

「室蘭市港北町6丁目」

「だから何なんだ」と言われると、二の句を継げない本の話ですが、お聞きください。

市内某施設の廃棄本コーナーで見つけた清水義範の「ビビンパ」を読んでいたら、室蘭の地名が出てくる「謹賀新年」なる短編小説が載っていました。

東京・小平市在住の堀江長一郎さんと、室蘭市港北町に住む西崎進さんとの、昭和43年から54年までと昭和61年から平成2年まで交わした年賀状の文面を中心に話が展開していきます。この2人、室蘭の鉄鋼関連の職場で上司と部下の関係にあったようで、その後、堀江さんは東京へ転勤し、年賀状のやりとりとなったようです。

で、何が引っ掛かったかというと西崎さんの住所「室蘭市港北町六の七七三」。調べると、港北町は5丁目までで、6丁目はありません。それ以前に、清水セン

昭和四十六年元旦
お変わりなくおすごしですか。課長と二人でよく行ったり
ぶれました。年の流れを感じます。
千 崎 室 蘭 市 港 北 町 六 の 七 七 三
西 崎 進

セイ、なぜ一方の住まいを室蘭にしたのか、知己を得たなら、是非お聞きしたいところです。まあ、ただそれだけの話なんですね。

本をめぐるアレコレ2

「夜の底が」・・・

「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。夜の底が白くなった」

川端康成の名著「雪国」の有名な書き出しですが、最近、織田作之助の小説を眠り薬代わりに寝床で聞いていて「? どちらかがパクったか」と覚醒しました。

織田の「秋深き」と題する小説の一文。「暗がりのなかへひとり取り残されて、私はひどく心細くなった。(略)夜の底がじーんと沈んで行くようであった」

ネットで調べると、この「夜の底」なるフレーズ、織田のエッセイにも一度出てきます。

(2つの作品、書かれた時期は?)と、調べてみましたが、途中で、やめました。下衆(げす)の勘繰りと、笑われそうです。

登別温泉で詠まれた一首(昭和初期)

地獄谷 業のけむりとなりがたし

恋のこころもつぶやくものを

与謝野 晶子

薫風 烈風

▶「ふらんすへ行きたしと思へども」行けない懐具合なので、最近は久しぶりにYouTubeで歩き旅の動画を探し、若者たちの「東京一京都旅」や「佐屋街道」「高野街道」「さば街道」などの徒歩旅を見ながらテクテク紀行のおすそわけにあずかっています。

「東海道」や「甲州街道」「中山道」など五街道の徒歩動画はもう15年以上前から拝見しているのですが、時を経てもなお、古道、旧道歩きに挑戦しようという若い男女は登場するもので、一度見たはずの一里塚や常夜灯、城下町の榊形道路も新鮮な映像として目に入ります。気楽な箱絵旅、この先も続きそうです。

▶朝のテレビドラマに出てきたBBS運動(Big Brothers and Sisters Movement)なる言葉に触れ、かつての職場の同僚の顔を思い出しました。

運動の趣旨は割愛しますが、20代の頃、Fさんは退社後や休日に、その福祉活動に熱心に取り組み、定年後も保護司を続けていたはず。

安給料とキツイ仕事に汗した若い時代、ボランティアや文化関係の活動に私も含め、周囲の何人かは関わりを持ち、社会との接点を持つことで、会社で得られない人間模様など学ばせてもらいました。今の若者たちはどうかな、と案じつつ、皆さん、お元気で〜。